

じやりみち

…被災地支援情報…

第109号 発行日 2017.6.30
被災地 NGO 協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702

HP:<http://ngo-kyodo.org/>

Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>

E-mail:info@ngo-kyodo.org

口座番号 :01180-6-68556(郵便振替)

2017年度基本方針 「もう一つの社会」が被災地の復興を実現する

阪神・淡路大震災から22年を過ぎ、東日本大震災からも6年を迎えた。さらに昨年4月には熊本地震が発生し大変な被害をもたらしている。熊本地震での災害関連死は増える一方で、直接死の3倍以上となっている。被災した後の環境やストレスが大きな原因となる災害関連死であるが、専門職だけでなく多くのボランティアが被災者に向き合うことで、減らしていくことができるのではないかと思う。

22年前の阪神・淡路大震災を検証する『市民とNGOの「防災」国際フォーラム』では「くらし再建を『いま』を見据えて」ということを掲げスタートした。昨年度の基本方針でもあげたが、災害直後の災害ボランティア活動は多くの団体・個人が集まり活躍する一方で、緊急期が過ぎるとボランティアの受け皿はなくなり、あたかも災害から立ち直ったかのように見えてしまう。実際には、復興期のくらしをどう再建していくかということには長く時間がかかるのだが、地元の担い手が何をどう進めればよいかわからない、ということもよく見受けられる。災害が起きた直後からの支援活動は、復興期における暮らし再建と連続しており、減災サイクル(図1)のようにつながりを持っているかなければならないのだが、実際にはそれぞれが分断されている状況である。

復興期における暮らしの再建は、最低限の生活を保障した上で、必ずしも災害前と全く同じ状況に戻すということではないと考える。地域の暮らし方を再び見直し、例えば地産地消、地域コミュニティの再構築、外部からの交流人口の増加、新たな助け合いの仕組み作りなど持続可能なコミュニティを目指していくということが暮らし再建と言えるのではないかと思う。そう考えた時に、減災サイクルにおいて重要な「もう一つの社会」がキーワードになるだろう。従来の社会のあり方ではなく、地域のコミュニティが持続していくためのもう一つの社会を作り出すことが、実は暮らし再建、そして復興に繋がるのではないだろうか。そのためには、従来の価値観からの転換を進めなければならない。地域の魅力再発見、暮らし方の見直し、コミュニティにおける住民のつながりを再構築していくなど、被災地復興には欠かせない取り組みの中にそのヒントがあるのではないかと思う。こうした取り組みを特に、被災地の地元住民が主体となって取り組むことが、持続可能な社会につながり、住民の自立につながる。

もう一つの社会を作り出すということは、昨年度の基本方針でもある、「もう一つの生き方を選択し、もう一つの働き方を選択する」ということでもある。災害後に、自分の

暮らし方や働き方を見つめ直し、もう一つの働き方をする若者が増えていくことが、もう一つの社会を生み出す原動力となるだろう。地域の中に、地元で根ざした生業を生み出すこと、自然との共存を体現する生業を生み出すことなどが、地域の地力を高め、地産地消を進め、持続可能な社会へとつながることになる。

したがって、災害復興はこうした価値観の転換をする大きなチャンスとも捉えることができる。災害前の考え方は次に同じ災害が起きた時に、また同じように被害が出てしまうからである。価値観を転換していくためには、暮らし再建という大きな目標に向かう中で、少しずつ議論を重ねることが大切ではないかと思う。小さな声を見逃さず、一人ひとりに向き合うことが大切だ。このことは、震災20年のフォーラムで作成した10のアクションプランの具現化に他ならないだろう。

熊本地震など被災地の復興支援を継続しつつ、地元住民の方々と共に悩み、議論を重ねていく。その中にもう一つの社会を生み出す要素が多く含まれていると確信する。10のアクションプランをどう現場で実践するのかを模索しながら、住民主体の復興の大きな流れを作り出し、もう一つの社会の実現に向けて模索を続けていきたい。

(頼政良太)

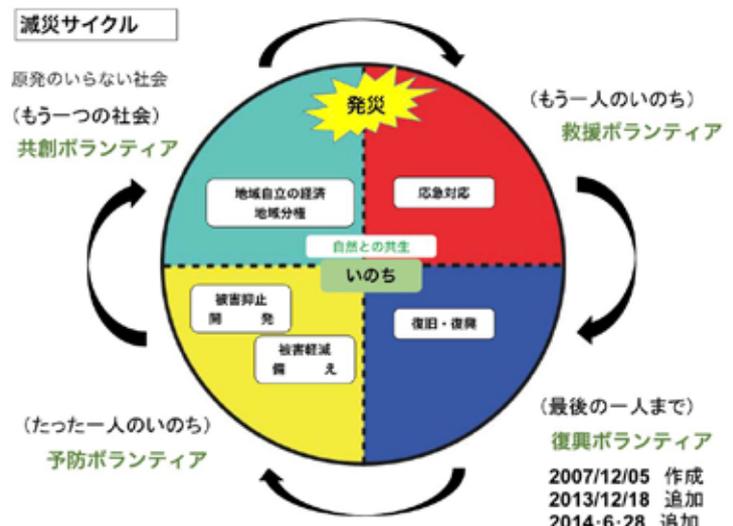


図1 減災サイクル

2016 年度事業報告

1. 寺子屋事業

2016 年度は「もう一つの生き方、もう一つの働き方を考える」とテーマを設定し寺子屋を開催する予定であったが、熊本地震の影響により予定通りの開催はできなかった。

7/2 農業について学ぼう 講師：尾澤良平

10/4 「NGO で働くとは？」講師：今中麻里愛

1/17 番外寺子屋 熊本地震の「今」を語り合う

講師：鈴木隆太・寺本わかば・丸山真実

2. まけないぞう事業

岩手県中心に「まけないぞう」事業を展開。現在の作り手の人数は 55 人となった。阪神・淡路大震災を超える 6 年の仮設生活が続き、精神的にも限界を超えている。取り残され再建をあせる人、思うように家が見つからない人など疲労や不安も増しており、「くらしの再建」はまだまだ途上です。被災者は「こんなはずではなかった」と様変わりする故郷をみながらため息交じりの言葉をこぼしています。「そんな被災者の心を癒すものが「まけないぞう」となっています。

一枚のタオルを「まけないぞう」さんにして、目の前に並べていく。1ヶ完成、でも寂しいよ！2ヶ3ヶと、そして50ヶの完成。夢中な心が寂しさをなぐさめ、充実感、幸福感で満たされます。単身の私にとって、家族が増えていくみたいな感じがあって、心のケアになっているのだと思います。ありがとうね。

まけないぞうを長期的に支援してくれている方からのメッセージを以下に紹介します。

桜ももうすぐ見頃をむかえます。まけないぞうさんも湯田小卒業生にプレゼントして20年過ぎようとしています。卒業生、担任の先生が、自分たちも何か役に立ちたいと毎年タオルを集めて「送って下さい」と持って来てくれます。ほんの小さな気持ちがつながってつながって和になっていくんだと改めて思います。小学生の気持ちを送らせていただきます。お役に立てれば幸いです。(広島県福山市)

というメッセージを頂きました。

・2016 年度実績：7,230 頭出荷（うち子ぞう・親子ぞう・リングぞうは3,000 頭、212 件）

3. 災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 災害発生時の対応

2016 年度は熊本地震が発生し、そちらの支援を中心に支援活動を展開した。当センターでは、熊本県阿蘇郡西原村に拠点を構え、現地スタッフを雇用し、災害ボランティアセンターの運営支援や避難所等での足湯ボランティア、集落再建支援などを展開している。(現在も継続中) その他、茨城県常総市水害の支援、広島土砂災害の支援も継続して行なった。

(B) 東日本大震災支援の継続

まけないぞう事業は引き続き、神戸からのサポート体制を継続した。

* まけないぞうの記録はまけないぞう事業の項を参照

(C) 復興支援活動

・KOBЕ 足湯隊のサポート

当センターが事務局を努める「KOBЕ 足湯隊」は、主に能登半島(2007 年地震発生)・兵庫県佐用町(2009 年水害発生)など地震や水害の被災地に出かけてきた。能登半島地震の被災地では、毎年継続的に

熊甲祭りに参加。また、今年度は能登半島地震 10 年の記録誌を作成した。また、「ポーアイ 4 大学連携事業」として、レガッタ神戸での神戸マラソン応援イベントにて足湯ボランティアを行なった。

(D) 南海トラフ巨大地震に対して

・女性が担う地域防災塾との協力

昨年度に引き続き、女性が担う地域防災塾(たつの市)の活動へ参加。同塾生と共に熊本地震被災地での足湯ボランティアを行なった。

4. 提言・ネットワーク事業

(A) もう一つの働き方、もう一つの生き方についての模索

寺子屋事業が十分に開催できず、テーマについて深く議論ができなかった。今年度引き続き、模索していく予定。

(B) ボランティア経済圏の具現化

まけないぞう事業を通して具現化について図った。

(C) インターン受け入れ

神戸学院大学 / 神戸松蔭女子学院大学

今中麻里愛(神戸学院大学)

(D) その他

2016 年度で第 12 回目となる東海地震に備えた「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」でのネットワークには引き続き関わっている。県外メンバーとしてプログラム作成のためのワーキンググループ(WG)にもスタッフの頼政が参加した。

<関係団体・グループとのネットワーク>

・しみん基金 KOBЕ / 副理事長

・震災がつなぐ全国ネットワーク / 団体会員・事業担当責任者

・人と防災未来センター / 事業評価委員

・日朝兵庫友好の会 / 常任委員

・レスキューストックヤード / 評議員

・CODE 海外災害援助市民センター / 理事

・日本災害復興学会 / 理事

・関西学院大学災害復興制度研究所 / 外部研究員

・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会

・9 条の会ひょうご

・KOBЕ ピース i ネット

(その他)

・神戸大学非常勤講師 / 神戸学院大学非常勤講師 / 福井大学非常勤講師 / 神戸松蔭女子学院大学非常勤講師 / 神戸女子大学非常勤講師 / 日本防災士機構 / 講師

5. 広報事業

会員間の連携と協働の充実を図るとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行った。

・じゃりみち 1 回発行(各約 800 部)

じゃりみちは熊本地震等の影響で年 1 回しか発行できなかった。

・FB などの SNS も利用しながら情報発信を行っている。

6. その他

(A) 脱原発 24 時間リレーハンガーストライキ

2012 年度から継続して脱原発ハンガーストライキを「原発が停止するまでやり遂げる覚悟」持って今日まで続けてきた。

2017年度事業計画

1. 寺子屋事業

今年度の寺子屋事業は、昨年度に引き続き「もう一つの生き方、もう一つの働き方を考える」というテーマで開催。CODE 未来基金とも連携をとる。

(A) もう一つの社会を生み出す働き方・生き方とは？

CODE 未来基金と連携し、毎月1回開催する（6月から）年8回程度の予定。

2. まけないぞう事業

今年でまけないぞうが生まれてから20年。これまでのつながりを生かし、「まけないぞうありがとうキャラバン」を行う。

東日本大震災の被災地では、仮設住宅での暮らしが7年目に入り、被災者も高齢化が進み体調の悪化を訴える人もいる。まけないぞうによる精神的支えは大きい。今年度も被災者がまけないぞうを必要とする日がなくなるまでは継続する。

(A) 東日本大震災支援の継続

ハード優先の復興により、人口流出、高齢化、雇用創出、コミュニティの崩壊といったさまざまな問題が被災地に押し寄せている。その中でまけないぞうが被災者の心の支えになっていることから、今年度も継続的に活動を続けていく。

(B) まけないぞう20年企画

20年メッセージ集作成、20年の歩み展覧会、作り手さんの交流など当事者である作り手さんと支援者のつながりを深めていく。

◆作り手メッセージ集：完成目標1月17日

◆20年のあゆみ：まけないぞうの歴史・展覧会（時期：7月頃）

◆神戸の作り手と東日本大震災の作り手との交流（10月頃予定）

◆キャラバン：つながりのある団体・個人を通じて各地を訪問する。

(C) 広報・販促に関して

今20年企画を中心として、一層の販促の強化に励む。

3. 災害救援事業

阪神・淡路大震災や東日本大震災の経験やこれまでのつながりを生かしつつ、災害時には迅速に対応できるよう、災害が発生した地域の特性に合わせて活動を行う。

熊本県西原村での支援活動を継続し、住民主体の復興を進められるよう、地元中間支援組織（西原村 Reborn ネットワーク）の立ち上げ・運営サポートに重点を置き、これまでの支援活動をハンドオーバーしていく。将来予想される大災害（南海トラフ巨大地震など）を念頭に、事前に顔の見える関係づくりを進めていく。

(A) 災害発生時の対応

これまで築いてきたネットワークなどを活かしながら、災害発生時にはすばやく被災地へ入り活動する。

(B) 復旧・復興支援事業

・まけないぞう事業を通した東日本大震災支援の継続

・広島土砂災害支援の継続

これまでつながった緑井上組の町内会とつながりを継続していく。また、番外編寺子屋として、広島市の行政が今後の土砂災害についてどのように考えているかを通して、行政の防災について学ぶ。

・熊本地震支援として、西原村での支援活動を継続。

(C) 南海トラフ巨大地震に備えて

・静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓

練（3月開催予定）

静岡県で行われる災害ボランティアのための図上訓練に参加し、日頃のからの顔の見える関係を築いていく。

・女性が担う地域防災塾との協力

昨年度に引き続き、たつの市での活動等に積極的に関わっていく。たつの足湯隊の活動も必要に応じてサポートを行う。

・高知県などとのネットワーク作り

2013年度につながった高知県黒潮町へのスタディーツアーをたつの女性が担う地域防災塾と連携し行う。

・ひょうごボランタリープラザ「災害ボランティアコーディネーター養成講座」への参画

4. 提言（アドボカシー）・ネットワーク事業

熊本地震での復興の取り組みや寺子屋事業を通して、「もう一つの社会」を模索し、被災地復興がもう一つの社会の構築と密接に関わっており、社会の中での価値観の転換が必要なことを提言する。全7回の寺子屋シリーズとさらに総括版の寺子屋を行うことで、様々なテーマが実はもう一つの社会と密接に関わりあっていることを明らかにする。年度末には、寺子屋事業の成果を冊子にまとめ形に残す。

<関係団体・グループとのネットワーク>

・しみん基金 KOBE/ 副理事長・震災がつなぐ全国ネットワーク / 団体会員・事業担当役員・人と防災未来センター / 事業評価委員・日朝兵庫友好の会 / 常任委員・レスキューストックヤード / 評議員・CODE 海外災害援助市民センター / 理事・東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク委員会・9条の会ひょうご・社会福祉法人野花会 / 評議員選任委員・おおさか災害支援ネットワーク・たつの女性が担う地域防災塾・伝統木造技術文化遺産準備会・西原村 reborn ネットワーク・全国災害ボランティア支援団体ネットワーク (JVOAD) / 避難生活改善専門委員・災害救援ボランティア活動支援関係連絡会議・社会福祉法人太陽の会 / 評議員・神戸大学非常勤講師（村井） / 福井大学非常勤講師（村井） / 福井大学医学部非常勤講師（村井） / 神戸女子大学非常勤講師（村井・頼政） / 日本防災士機構講師（村井）

5. 広報事業

(A) 通信「じゃりみち」の発行

年3回の発行を予定

（6月 / 10月 / 3月）

(B) Facebook の利用

引き続き Facebook でも情報発信を行う

(C) メールニュースの配信

これまで通りメールニュースを配信する。

6. その他

(A) 脱原発レーハンストを継続する。

(B) JICA 草の根技術協力事業実施

JICA 草の根技術協力事業（新・草の根協力支援型）を受託し、たつの女性が担う地域防災塾のメンバーとともに、インドネシアの防災について学び、現地の方々とも交流を行う。

(C) 基本方針に合致すると思われることにおいても可能な限り取り組む。

熊本地震救援活動

特集

昨年4月に発生した熊本地震。当センターでは、1年以上継続して支援活動を展開してまいりました。詳しい活動内容などは、HP (<http://blog.livedoor.jp/kyodocenter-kumamotojishin/>) をご覧ください。

熊本地震から1年が過ぎました。当センターでは、熊本県阿蘇郡西原村を拠点として支援活動を継続しています。事業計画でも触れていますが、今年度は西原村 reborn ネットワークのサポートを中心に活動していきます。今号では現在の課題について特集をお届けします。

■集落の再生へどのように合意形成していくのか？

西原村では、昔ながらの集落と新しく西原村に引越してきた方の多い地域があります。昔ながらの集落は山間に家が建っていることが多く、次の地震への備えやがけ崩れ、土砂崩れ、河川からの浸水などの災害リスクをどう考えていくのかということが課題になっています。また、山間部に建っているため宅地の被害や法面、擁壁の被害なども多くあり再建までに非常に時間がかかるということや、高齢のため再建を諦める方などおられ集落をどのように維持していくのかということも課題となっています。現在は、集落再生に向けて集落内での移転や道路の拡幅、排水路の整備などの計画を立て、役場と共に日々議論を重ねています。なかなか簡単に結論が出る話ではなく、住民の合意を得るためには話し合いを積み重ねていくことが大切です。

一方で、新興住宅の多い地域では、もともと自治会に加わっていないという方も多くいます。この地震をきっかけにして、避難所運営などを通じ、新しく移住した住民の方々と元々の住民の方々とつながりは深まってきていますが、他の地域と比べてまとまりを作っていくことが難しい状況です。比較的被害が少ないエリアに新興住宅は多かったのですが、家が壊れてしまった方もいないわけではあ



りません。また、別の地区から移ってくる方も多くいらっしゃる中で、どのように次の災害へ備えていくのかということも課題の一つとなっています。

このように地区ごとにも状況の違いが出てきており、被害の大きかった地区と少なかった地区の住民との間に意識のギャップが生まれてしまっている部分もあります。西原村は集落意識が強い分、別の地区の情報が入りづらいという背景もあるようです。こうした状況を改善していくため、地区ごとの取り組みの共有の機会も今後作っていきたいと考えています。

■個人の家をどのように再建するかはまだはっきりとは決められない

集落再生もそうですが、個人の家のもう再生もまだはっきりとは決まっていないう方も多くいらっしゃいます。集落内の宅地整備や道路拡幅などの計画が出てこない部分と細い部分は決められないという方もいます。また、家族内でも意見が分かれているケースもあります。夫は地域に残りたいという気持ちが強いが、妻は子どものことや次の災害リスクを考えて移転を希望しているというケースなどです。年配の方の場合は、息子さんや娘さんが近くに住んでおらず将来戻ってくる見込みもないため、新しい家を建設することに躊躇されている方もいます。経済的に再建が難しいという方も、復興住宅の建設地がどこになるかわからず、不安を抱えている方もいます。

このように個人宅の再建も未だにはっきりとは見えてきていない方も多くおり、すでに集落内に再建すると決めている人、着工している人、集落外に出ることが決まっている人、迷っている人など様々な方がいらっしゃいます。その中で集落再生の議論を進めていかなければならないところが難しい部分です。

■みなし仮設住宅への支援はどのように？

仮設住宅の支援も、被災者・支援者双方から、一方的に与える支援（物資を無料で配布するなど）から、自立のために少しずつ住民主体で参加型にできるように変化をしていかなければいけないという意見が出てくるようになりました。一方でみなし仮設住宅に入居している方々への支援はなかなか届いていないというのが現実です。先日行われた村民による大座談会では、「子どもの送り迎えのため、隣町から西原村に通ってきているが、日中の居場所がなく毎日2往復している。みんなの家のように集まれるみなしの家のような居場所があれば、もっと西原村に帰ってこれるので、そんな場所を作って欲しい」という声もありました。みなし仮設住宅にお住まいの方の声をまずは聞く機会を作ることが大切です。そして、皆さん口々に情報が届



いていないということをおっしゃっています。みなし仮設にお住まいの方に情報を届け、居場所作りなどの支援が急務です。

当センターでは、地元のネットワーク組織である西原村 reborn ネットワークのサポートを行いながら、多様な団体・個人の連携を深め、このような課題の解決に向けての動きを作り出していきたいと考えています。今後もご支援ご協力をよろしくお願いします。(頼政良太)

2017年度寺子屋セミナー こんな生き方あったんだ!?

～農業・漁業・林業・NPO/NGO・僧侶・・・

多様な働き方・生き方を通してもう一つの社会を見える化～

被災地の復興に欠かせないのが、被災前の価値観からの転換を図ること、つまり、「もう一つの社会」を実現することである。従前のままの考え方で再建を行ってしまうと、再び災害が起きたときに同じように大きな被害を受けることが懸念される。そうならないためにも、自然との共存や地域のあり方、暮らし方の見直しをし、どのように暮らしを持続させていくのかを問い直すことが必要である。このような価値観の転換は、災害からの復興のみならず過疎化が進む地方や少子高齢化の日本社会の中でも求められている。

価値観の転換には、第一次産業のように地元で根ざした仕事をしている方や、NPO/NGOのような非営利のセクターで働く方など、新しい「もう一つの働き方・生き方」を選択する人が増えていかなければ難しいと考えられる。そこで、今回の寺子屋シリーズでは、実際に「もう一つの働き方・生き方」を選択し、実践を続けておられる方々をお招きし、①なぜその活動(仕事)を選んだのか?②なぜその活動(仕事)を続けているのか?③その活動(仕事)を通して生き方(や人生)がどう変わったのか?という3つの視点からお話をお聞きし、「もう一つの社会」に欠かせないものは要素とは何かを解き明かしていく。

第1弾
6 / 21

地域おこし協力隊から農業 支援へ

地域おこし協力隊や農業復興ボランティアセンター(現:西原村百笑応援団)の活動を通して、農業という切り口でお話いただきます。

講師:河井昌猛さん 西原村百笑応援団 **終了**

第2弾
7 / 24

まちづくりにこだわって被災地に関わり続ける

被災地に関わり続ける講師からその原動力をお聞かせいただきます。

講師:宮定章さん 認定NPO 法人まち・コミュニケーション

第3弾
8 / 18

これからのソーシャル・セクターを担う若者たちへ

若者とソーシャル・セクターを「つなぐ」立場として、仕事のやりがい、若者へのメッセージをいただきます。

講師:大福聡平さん NPO 法人しゃらく

第4弾
9月ごろ

これからの林業

林業の「いま」はどうなっているのか?実際に林業で仕事をしている方に起こしていただき、その実態をお話いただきます。

講師:調整中

第5弾
10月ごろ

被災地に飛び込み仕事として復興に貢献する

被災地に飛び込み、移住をしたり元々のノウハウや技術を生かして被災地の復興に関わる方々の思いとは?その気持ちを語っていただきます。

講師:斎藤誠太郎さん 一般社団法人ISHINOMAKI2.0

第6弾
11月ごろ

僧侶として、住民として被災地に関わるとは?

僧侶として活動する傍で被災地支援に奔走する鈴木さんに、僧侶として、そして地域住民として活動することの意味を語っていただきます。

講師:鈴木隆太さん 曹洞宗東禅寺・副住職

第7弾
12 / 8

新たな地産地消エネルギーに挑戦する

宝塚でエネルギーの地産地消に取り組んでおられる実践を学び、新しいエネルギーのあり方について模索します。

講師:井上保子さん 株式会社宝塚すみれ発電

まとめ
1 / 31

もう一つの社会を生み出す働き方・生き方とは?

これまでの7回を振り返り、まとめの講演をいただき、もう一つの社会、そしてもう一つの働き方・生き方について議論を深めます。

講師:山口一史さん ひょうご・まち・くらし研究所

第1回寺子屋地域おこし協力隊から農業支援へ 河井昌猛さん（西原村百笑応援団）

大阪府高石市生まれ。周りの人と同じことをすることが嫌で、とにかく勉強が嫌いだった。高校卒業後、専門学校に。外国に行くという漠然と目標をたてて、お金を貯めて95年にワーキングホリデーへ参加し、1年弱で帰国。その後、職を転々とした。最後は一般貨物運送業に従事して、急に社長になれと言われ、すごく大変だった。

その後、転機は2011年3月末ごろに発病したこと。原因がわからず治療方法も見つからなかった。急激に動けなくなり体重激減。友人の勧めで2011年8月にスリランカに入院。その後、9月に韓国で入院して治ることができた。この頃から人生を考え始めた。

2012年1月に人生を変える出会いがあった。地域起こし協力隊の人と出会い、「自分も応募しよう」九州が良いと思っていたら、たまたま日田市に募集が出たので応募。人生変えようと決めてからはトントンと進んでいった。地域おこし協力隊として一番やっていたことは、おじいちゃん・おばあちゃんの話相手をする事。

被災地の活動経験はゼロ。協力隊で中越防災安全推進機構の稲垣さんと知り合い、その縁で西原村に。家の前で動けない人やがれきを片付けている人に心が揺さぶられた。

5月4日に関係者で農家支援について会議。5月にさつまいもの苗を植えないと収入がなくなるという問題があった。その会議ではみんな農家の支援をやるという方向がぶれず、2時間弱の会議で農業ボランティアセンターをやる

ことになった。最初の不安点は、素人が農家の支援をできるのか？教えるのも大変、という部分。しかし、わらにもすがる思いの農家さんと思いのあるボランティアがうまく噛み合った。苗植えなど比較的簡単な作業も多かったことも良かった。農業ボランティアを通じて学んだことは、復興には三段階があること。1、引っ張り上げる、2、一緒に歩む、3、応援を続けるということ。

その後日常的な農業支援の団体を立ち上げることに。外部支援だけでなく地元農家7人と外部支援者で結成した。西原村の地区が5つあり、農協の理事と私との8人でスタート。

9月ごろから（一社）ふるさと発・復興志民会議を立ち上げ活動開始。中越に行き、中間支援が必要だと考えた。外部から支援が入ることで、精神的に支えられる。忘れられることが一番つらい。弱い力も集まれば強い力になる。

こうした活動を通して、考え方や意識が変わった。昔は自由気ままにやりたくないことは理由をつけてやってこなかった。チャンスは準備して備えてきた人にしか来ない。結果は全て自分自信で引き寄せている。自分の未来を自分で引き寄せている。

一番は「感謝」。周りの人がいて初めて相乗効果が生まれている。人との出会い。人間は乗り物。推進力（欲）は脳で、バランスは心で。体と心と脳とうまくバランスをとっていくことが大事だよね。考えるよりも感じることを大切に今後も活動を続けたい。

■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています！

初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

■じゃりみち休刊のおわび

昨年度は熊本地震等の影響もありまして、じゃりみちの発行がなかなかできず、久しぶりのじゃりみちとなってしまいました。大変申し訳ございません。

本来であれば、昨年度の寺子屋のご報告なども合わせて行わないといけないべきでしたが、紙面の関係上割愛をさせていただいております。どうかご了承ください。

今年度は、このようなことがないようにしっかりと編集等も行っていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

なお、じゃりみちをお読みになって気づいた点などがございましたら、当センターまでお気軽にご連絡ください。どうぞよろしくお願いいたします。（頼政良太）



当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願ひします。

昨年4月に発生したネパール地震の支援活動を開始しています。皆様ご協力よろしくお願ひします。詳しくはHP等をご覧ください。
HP:<http://code-jp.org/>

■入会・カンパのお願い

被災地NGO協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。ぜひよろしくお願ひします！

活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によりしくお願ひ致します。

★団体会員	年会費 ¥ 10,000	×	1口以上
★個人会員	年会費 ¥ 3,000	×	1口以上
☆団体賛助会員	年会費 ¥ 10,000	×	1口以上
☆個人賛助会員	年会費 ¥ 3,000	×	1口以上
☆自由選択会員	年会費 ¥ 任意の額		

郵便振替 加入者名：被災地NGO協働センター
口座番号：01180-6-68556

第59号 2017.6.30



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
 TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/



今年3月11日、東日本大震災から丸6年、仏教でいうと7回忌を迎えました。あれからもう丸6年が経ちましたが、被災者の方はこれまでに例のない仮設生活が7年目になってしまいました。いまだ自宅の再建もできずに、厳しい現実が突き付けられています。

■復興とは・・・？

あの未曾有の津波被害で死者は1万5893人、行方不明者は2553人、震災関連死は3523人となっています。(2017年3月現在)犠牲になられた方には心よりご冥福をお祈りいたしますとともに、行方不明者の方々が一日も早く戻って来られることをお祈り申し上げます。

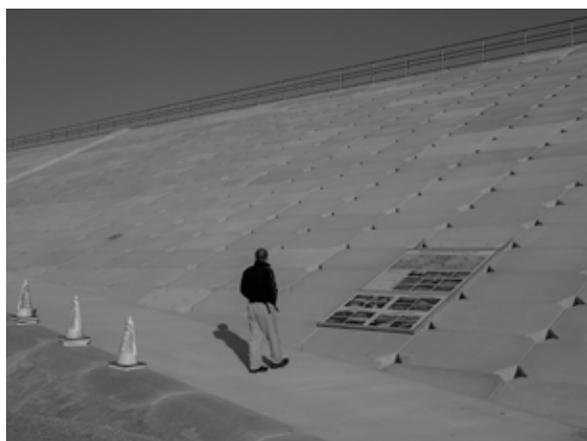
東日本大震災からの復興途上にあった岩手県岩泉町では、昨夏の8月、台風10号により、二重三重の被害を受けました。福島的第一原発では、終息する気配もないまま、自主避難者の住宅補償が打ち切れ、いまだ多くの被災者は復興、いや復旧の途上なのかもしれません。

～作り手さんからのメッセージ～

今年の3月11日は仏教では7回忌になります。精神的な区切りの年になるのかと思います。「まけないぞうさん」を作って5年になります。最初は仮設住宅の集会所で講習を受け、その後1年ほど月に1～2回集まって作りました。そして、幼稚園などに行って園児達に手渡しました。よろこんで受けとってもらえました。私の娘はイギリスで暮らし、現地(イギリス)で支援してくれた方々にもお礼として贈りました。今は個人でそれぞれ製作しております。楽しい時間をありがとうございます。(2017/1/7 宮城県石巻市)

■災害公営住宅の現状

東日本大震災の被災地では、仮設住宅は歯抜け状態となり、巨大な復興住宅が姿を現しています。昨夏、陸前高田市では岩手県最大の災害復興住宅が完成しました。9階建てと8階建ての2棟で301戸を整備、そのうち入居見込みは206世帯で、このうち1人暮らしの高齢者は24.8%に及ぶそうです。高齢化に加えて、各地から入居するためコミュニティの再形成が求められます。ぞうさんの作り手さんの中にも、別の復興住宅で戸建ての暮らしに慣れているため、高層階から降りるエレベーターに当初一人で乗ることができず、部屋にひきこもることが多く、庭もなく草花も触れず、寂しい思いをしていた人がいました。いまはやっと近くに小さな貸農園を借りて、野菜や花を植えて楽



しんでいきます。そして、町を囲むように海側に高さ12.5m、長さ2キロの巨大な防潮堤がほぼ完成しまし

た。コンクリートの要塞を前に、これが復興なのか？と首をかしげたくくなりました。

作り手さんの中には、新築のための土地を申請していますが、いまだ造成が終わらず、予定では30年度末までかかるという人もいます。一部地域では工事を延長したというニュースもあります。

～作り手さんからのメッセージ～

東北もようやく桜が満開となりました。東日本大震災から7年目に入りました。まけないぞうに出会い、楽しく作っています。こんなに長く続けるとは夢にも思っていませんでした。スタッフのみなさんには本当に感謝しています。これからもよろしくお祈りします。(2017年4月20日 岩手県陸前高田市)

■"人からコンクリート"へ逆戻り

釜石市の被災者向けの宅地に強度不足が発覚し、造成のやり直しを行ったという報道がありました。「被災者向けに完成した釜石市内の造成地で強度不足が発覚したのは初めて。市は『異例のケース』としているが、今後も強度不足が分かった場合、引き渡し後でも責任を持って対応するとしている。～中略～県内の被災地では、一昨年に陸前高田市と田野畑村で、昨年大船渡市でそれぞれ高台造成地の強度不足が発覚している」(2016/10/14 朝日新聞)と伝えています。沿岸の造成をみていると素人でも不安になります。山はその面影を残すことなく削られ、住民は「山津波」を心配しています。海には大きな防潮堤が次々と姿を現し、海が見えずに不安をにじます住民など、「人からコンクリート」へ逆戻りしたまちづくりが進んでいます。被災者の「こんなはずじゃなかった」という言葉が、悲しく響きます。今後、被災地ではどのようなまちが生まれるのか？どうなっていくのか？私たちに何ができるのか？自問自答しながら被災者の人たちの声に耳を傾け、「まけないぞう」と

もに長い復興への道のりを見守っていきたいと思います。

■まけないぞう 20年

1995年阪神・淡路大震災がきっかけで、2年後の1997年に被災者の生きがいを支援しようと「まけないぞう」が



生まれました。その「まけないぞう」が生まれてから今年で20年を迎え、累計で27万頭が日本各地、世界各地に旅立ちました。みなさんにこの長い間支えられ、育てられ20年を迎えることができました。

そこで、今年は「まけないぞう 20年ありがとうキャラバン」を開催します。その第1弾として、今年4月岩手県釜石市に

訪問しました。「3.11」からずっと「まけないぞう」を応援してくれている不動寺（高野山真言宗）さんがあらたに新四国88ヶ所、新西国33ヶ所の霊場をお世話することになりました。それで、20年目の節目にお礼の気持ちとともに被災地の復興を願って、

121体の「まけないぞう」を奉納させていただきました。今回は、不動寺の住職補佐森脇妙紀さんと「まけないぞう」の作り手さんと地域住民の方、高野山真言宗総本山金剛峯寺の社会人権局からは雨貝覚樹さん、木下友真さんが駆けつけてくださり、約15名の方たちと、霊場の険しい山道に建立されている石仏一体一体に「まけないぞう」を奉納させて頂きました。



久しぶりに岩手を訪問した村井顧問はまるでサンタクロースのように「まけないぞう」を運んでいました。また makenazione 編集長の田中幸子さんから届けられたアイル



ランドの植物園にかけられた「チベットの祈りの旗」の写真も一緒に奉納させて頂きました。

こうして、霊場を通して、いろいろな人や想いがつながることに、感動させられました。

作り手さんもとても喜んで頂き、「こうして再び皆さんが集う場になると思うと感無量。象さんを作ることで癒された。

感謝の思いを込めて納めた」や「震災以来訪れることがなかったが、ぞうさんの作り手さんと一緒にここに来ることができて、夫や息子の分も頑張って生きていこうと思えた」と取材に答えていました。

中には、普段はほとんど歩けないのに、杖をつきながらきつい山道を、何度も休憩をし、時には転んだりしながら、必死に登り切りました。「88歳だから88ヶ所お参りしたかったの」と言い、最後はとても清々しい顔をしていました。



20年という節目の年にこうして、「まけないぞう」を被災地にある霊場に奉納できたご縁に感謝します。

～まけないぞうの作り手さんからのメッセージ～

世界中で災害が多く、弱い人に一番負担がかかります。そんな中、ぞうさん作りをしながら自分もパワーをもらい、また誰かにパワーを送ることができるといいなと思いながら作成しています。早く世界中が笑顔になるようにと願っています。(2017/5/1 岩手県大船渡市)

いまだ、被災地の復興は終わっていません。その長い苦しい生活のなかで、「まけないぞう」が被災者の方の心の支えになっています。

別紙、「まけないぞう 20年ありがとうキャラバン」のチラシを同封いたしますので、ぜひご協力ください。



先日送って頂いたぞうさん、被災者のみなさんのバスツアーの折り、子どもたちへのプレゼントにして頂きました。大変喜んでくれたそうです。福島から神奈川各地に自主避難している皆さんが久しぶりに集い、楽しい一日だったとか。ぞうさんが一役かってくれた姿が目に見えます。ポイントが貯まったのでタオルに交換しました。使ってください。